

「明治武士道」にみる「文明の精神」の普及

— 新渡戸稲造と実業之日本社を中心に —

The Pervasion of ‘The Sprit of Civilization’ through the Invented ‘Bushido’ in Meiji Era

— the Role of Inazo Nitobe and the Japanese

Trade Company, *Jitsugyo-no-Nihon-sha* —

船 場 大 資*

Daishi Funaba

(要旨)

本研究は、明治期に創られた「明治武士道」の思想と普及を明らかにするものである。佐伯真一が、「新渡戸以降の〈武士道〉論や戦後の武士論をたどって、武士の理想化が、その後どのように完成していったのかを一つ一つ跡づけることは、とうてい筆者のなしうるところではない」と述べているように、「明治武士道」のイメージ形成やその普及については不明な点が存在する。そこで、「明治武士道」が、どのような思想をもとに形成され、普及したかという点を中心に考察した。

まず、「武士道」ブームの立役者である新渡戸稲造の「武士道」論を再考した。とりわけ、日本で出版された『武士道』に着目し、どのような思想を下地にして「武士道」論を紹介したのかに着目した。新渡戸は「武士道」規範を説明するさいに、次のように説明した。例えば、西欧社会の道徳観である「フェアプレイ」の概念を「喧嘩なら堂々とせよ！」と訳し、それは武士の伝統的な価値観でもあったと修辭する手法をとった。すなわち、西欧流の「文明の精神」を「武士道」の価値観として紹介する構造を有していた。

次に、普及について考察するために、新渡戸が執筆活動の拠点とし、編集顧問にも着任していた実業之日本社に着目した。同社の出版物は10万部以上刊行され、社会的影響力があったにも関わらず、これまで研究されてこなかった。そこで、同社の刊行物から「明治武士道」の構造とその普及について検討した。主には、新渡戸、社長増田義一、雑誌『実業之日本』における論稿から検証した。同社の刊行物から発信された「武士道」論とは、サミュエル・スマイルズの「真のジェントルマン」や、スポーツを通じた人格修養などの19世紀の西欧で誕生した「文明の精神」を紹介するものであった。実業之日本社を通じて、新渡戸ら知識人が、西欧流の「文明の精神」を「武士道」として普及していた事実を明らかにした。

はじめに

本研究は、明治期に創られた「明治武士道」の構造とその普及を考察するものである。佐伯真一や菅野覚明らの「武士道」研究によれ

ば、「武士道」は「創られた伝統」であり、明治期に誕生した「明治武士道」であったと評価されている。¹⁾ 両者の研究の主たる目的は、実際の武士の倫理観と「明治武士道」の思想が、異なっていたことを主張する点にあ

* 山口大学大学院東アジア研究科教育開発コース (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University, Education Course)

る。しかしながら、佐伯が、「新渡戸以降の〈武士道〉論や戦後の武士論をたどって、武士の理想化が、その後どのように完成していったのかを一つ一つ跡づけることは、とうてい筆者のなしうところではない」²⁾と述べているように、「明治武士道」の普及については言及されていない。

ところで、明治期の知識人たちが普及させようとした国民道徳の一つに、西欧流の「文明の精神」があった。英国人研究者W. G. Beasley(ビースリー)は、「日本は中国やトルコと同様に、社会ダーウィニズム主義者の言うところの准文明国に位置づけられており、それゆえ、〈文学、芸術、商業あるいは産業において、重大なることから些末なことに至るまで〉、西欧諸国に劣っていると認識されている。加えて、次なる高次の進化を遂げるためには、単なる産業や軍隊の強化ではなく、日本国は〈文明の精神〉を獲得する」³⁾必要があったと指摘している。事実、勝田政治は、当時の日本の状況を「欧米諸国と伍していく道としては、文明化=西欧化のみが設定されてくる。文明化の進展が、日本の国運を左右するものであると認識され、そのための国内改造が急務として位置づけられる」⁴⁾と説明している。それゆえ、「文明の精神」とは、産業や軍隊の強化のみならず、西欧列強と同等に、文明国家として認識されるための思想や道徳規範をもち得ていることの証明に際して必要とされた概念であった。

したがって、日本が西欧諸国から文明国家として認知されるために、明治期の知識人たちは「文明の精神」を国民に浸透させる方法について思案したと考えられる。加えて、「明治武士道」が明治期に創られたことを踏まえると両者が無関係であったとは考えにくい。そこで「文明の精神」と明治期に創られた「武士道」の関係及び、誰が、いつ、どのような「武

士道」として普及させたのかを以下の方法論を通して明らかにしたい。

まず、〈I 「明治武士道」の形成—新渡戸稲造著『武士道』を中心に—〉では、新渡戸の『武士道』が「明治武士道」論のさきがけとして果たした役割に着目した。彼の「武士道」論が、西欧流の「文明の精神」に基づくものであったのかについて検証し、加えて、どのような日本的な解釈が行われたのかについて考察する。次に、〈II 新渡戸稲造にみる「明治武士道」の普及〉、〈III 増田義一にみる「明治武士道」の普及〉、〈IV 雑誌『実業之日本』にみる「明治武士道」の普及〉では、「明治武士道」の普及に着目した。その際、実業之日本社の刊行物に焦点を絞った。同社に着目する理由は、新渡戸が『武士道』の刊行以降に文筆活動の拠点とした出版社であったためである。加えて、同社の刊行物は数十万部という発行部数や新渡戸を含めた著名な執筆陣(大隈重信、与謝野晶子、菊池大麓、安田善次郎など)を擁したにも関わらず、これまで注目されてこなかった。その理由は後述するが、これまで検証されてこなかった実業之日本社と新渡戸の活動を通じて行われた「明治武士道」の普及に迫りたい。(本稿では、引用文の旧字体は常用漢字に直した。また句読点と送り仮名を加えた。)

I 「明治武士道」の形成—新渡戸稲造著『武士道』を中心に—

菅野は、「明治武士道」には、国体論者による「武士道」と西欧論者による「武士道」といった二つの区分が存在すると述べ、著名な西欧論者として、新渡戸稲造に着目している。⁵⁾周知のように、新渡戸稲造著の『*The Soul of Japan*』は、1899年にアメリカにて出版された。日本では、1900年に英語版が、

1908年に和訳版『武士道』がそれぞれ刊行された。

しかし、この新渡戸の「武士道」論が、伝統性を有していないことはこれまでも指摘されている。例えば、佐伯は「歴史的に用いられてきた〈文字の出所〉には関係なく、当時〈普通に汎称〉されている言葉としての〈武士道〉に基づき、その内容としては自分の抱えている武士道徳のイメージを当て、根拠としては古来の逸話を適宜拾い出すという手法は、近代〈武士道〉論が出発点から抱え込んでいたものであった」⁶⁾と述べて、明治期に「武士道」が創られたとしている。こうした指摘は、「武士道」自体が可変的なもので、新しい「武士道」論が、誕生してゆくことを示唆している。

事実『*The Soul of Japan*』において、新渡戸は西欧の文明を日本的脈絡になぞらえて紹介している。新渡戸には、西欧人に向けて西欧の規範を元に「武士道」論を展開し、日本人が文明国の一員としての規範を携えていることを示そうとする意図があったように思われる。その意味では、彼は日本人に向けて「武士道」を著したのではなかった。しかし、日本語版では、「凡そ歴史上、欧州^{シヴァリー}武士道と日本武士道との如くに、酷似せるものあるは甚だ稀なり」⁷⁾とされ、騎士道と「武士道」の類似性に触れ、西欧規範を「武士道」として紹介することの正当性に言及している。

また、新渡戸が、フェアプレイという言葉を用いて、「武士道」を説明している箇所が存在する。それは、「Bushido as an Ethical system」(櫻井訳「第一章 武士道の倫理系」)の中にあり、項目の見出しは、「Fair play in Fight!」である。櫻井訳では、「喧嘩なら堂々とやれ!」⁸⁾と翻訳されている。一方で、2005年に刊行された(岬龍一郎訳)『武士道』では、「勇猛果敢なフェア・プレーの精神」⁹⁾

とそのまま「フェア・プレー」のカタカナ表記を残している。それゆえ、当時の翻訳版においては、フェア・プレーの英語表記を用いるよりも、より日本的表現に即して翻訳することに苦心したことが示されているように思われる。初版の刊行から9年の歳月を経て、はじめて新渡戸が翻訳を許可し、新渡戸自身も校閲したことから、新渡戸自身、和訳に積極的ではなかったこと、また、敢えて翻訳する際には、かなり注意深い検討の後、和訳本を出版したことがうかがわれる。

実際、記者の櫻井は「博士の此の著たる元、海外読者の為にせり」と前置きをした上で、「世人の或は解知に苦しむものあらんことを憂へ、博士と議り、原文に就きて、多少の修補削減を施したる所あり。而して訳文は悉く博士の校閲を経たりと雖も、文字の積は一に訳者に在り」¹⁰⁾と述べており、海外読者を念頭において書かれた書の翻訳であるゆえに、苦勞が伴ったこと、新渡戸自身の修正や校閲が必要とされた事実が示されている。つまり、新渡戸は、外見上は、あまり西欧的な中身にならないように、『武士道』の中身を日本化したと考えられる。

ピーター・マッキントシュによれば、「フェアプレイは、第1にスポーツにおける立派な行動に対する英国人の言葉であり、第2には人生の他の諸相においても比喩的に使われる同国人の用語である」¹¹⁾と説明しているように、英国人の日常生活における正義感の中核を貫く規範である。新渡戸は、このフェアプレイを「第1章 武士の倫理系」の中で以下のように「武士道」として紹介した。

喧嘩なら堂々とやれ!

ラグビー学校の小英人トム、ブラウンが『幼童を虐げず、巨童に背を示さざりし、男児なりとの名を伝えん』との希望

を笑うべしと雖、焉ぞ知らん。此の希望こそ即ち、一隅の首石にして、此れが上に道義の大厦高樓を築くを得るものに非ずや。…中略…

トムの希望は、すなわち英国が其の偉大なる国家を百代に建つるの基礎なり。而して、武士道の由って以て柱礎としたる所のものも、亦た此れと齋しきものあるを認むるに難しからず。吾人は、クエーカー教徒の如く、攻守の如何を問わず。兵は凶器也とせんとも。尚且つレッスンに倣いて、『徳は過より生ずるを知る』と云うを得べし。『卑怯』、『未練』は健全、質朴なる人格の受くる最醜の蔑辞なりとすることや、小児は此の観念を以て世に生まれ、武士も亦た然り。¹²⁾

上記にみるように、新渡戸は、英国のフェアプレイの倫理を櫻井の訳を通じて、日本に紹介するさいに、フェアプレイの文字を用いずに説明した。英国が巨大な国家となった理由を、英国の青少年向け人気小説であった『トム・ブラウンの学校生活』の主人公、トム・ブラウンの「小さな子を虐めずに、大きなものに立ち向かった男児として名を残したい」という言葉から説明した。そして、それは「武士道」に通じるものであると述べ、卑怯を嫌い、正々堂々と戦うことが「武士道」と示した。重要なことは、新渡戸が「武士の倫理」として、卑怯な行為を否定するさいに、西欧の規範（フェアプレイ）から説明したことにある。すなわち、西欧流の「文明の精神」を紹介したことの一部が示されている。

次に、新渡戸の「武士道」における「忠節」の概念について考察したい。原文では「The Duty of Loyalty」、櫻井訳では「第九章 忠節」にあたる。以下に示すように、新渡戸が国家論について述べている点に着目したい。

武士道はアリストテレス、若しくは近世二三の社会論者と等しく、国家は人に先んじて存在し、人は国家の中に生まれたるものなりとの概念を有するが故に、人は国家の為、若しくは其の機能を正當に掌握代表する者の為に生死せざるべからずとせり。¹³⁾

このように、新渡戸は、「武士道」は近代の国民国家論と同様の価値観を有していると述べ、国家は人に先んじて存在し、人は国家のために忠義を果たすものであると説明した。また、「其の機能を正當に掌握代表する者」は君主を思わせる言葉であるが、これは日本語訳の中で付け加えられており、英文では、(岬訳)「あるいは合法的権威のために」¹⁴⁾となっている。

さらに、忠節が生まれた経緯については、以下のように説明されている。

ソクラテスは律法（又は国家）をして語らしめて曰く、『汝は我が下に生まれ、教えられたるものなるに、汝焉ぞ、汝も亦た汝の祖先も、我が所に生まれたり、我が臣僕たるに非らずと云うを取えてせんや』と。吾人は此の語を聞いて、曾て以上の感を為さず。蓋し、斯の如きは古より武士道の昏頭に上りたるの語にして、唯だ彼に在りて律法と云い、国家と伝えるもの。我に在りては、形は異にして人格を云うの差ありしのみ。忠節とは、此の政治論理の産みたる論理なり。

予も亦たスペンサー氏が政治上の服従、即ち忠節は、過渡的作用を付与せられたるものなりとの説を耳にせざるに非ず。其れ或は然らむ。されど一日の徳は、一日にて足れり。吾人は此の語を反復し

て、自から歎びとせん。況や、其の一日とは、我国歌の所謂『さざれ石の巖となりて、苔のむすまで』の長き歳月を云うものなるを信ずるをや。是に於いて、吾人は、彼の平民的なこと英国人の如くにして、尚かつ、近時プトミー氏の言えるが如く、『祖先たる独逸種族が、其の酋長と其の子孫に対して尽くせる忠厚の念は、多少の漸変を経て、今日に至り、英国人の其の君主の血統裔種に対し、深厚なる忠節となれることは、彼の民の王室に表する多大の愛敬の能く之を證するものあり』と云えるを記憶せん。¹⁵⁾

つまり、ソクラテスの言である、国家あるいは法律に、「汝は、我が国家に生まれ教育を受けてきたのに、汝も、汝の祖先も我が国家の臣でないというのか」という引用を用いることで、封建領主への忠節を国家という単位に向けた政治論理に転換している。加えて、ハーバード・スペンサーの「政治上の服従、すなわち忠義とは過渡的な機能を与えられたにすぎない」と引用しつつ、「君が代」の歌詞を示して、日本人は、長い年月をかけながら忠節を育ててきたと説明している。

こうして明治維新とともに、忠節を誓う相手は、藩主から天皇へと変化したことを補強するために新たな忠節を再定義したと言える。新渡戸は続ける。

スペンサー氏は予言して、政治上の従属は、変移して良心の教示に忠なるに至るべしと。此の推理の実現せらるることありとせん乎。然らば果たして、忠節の念は、之に伴う尊を尊ぶの本能と共に、永遠に消滅すべき乎。吾人は此の主に対する忠義を彼君に移して、双者に対して、不信なること無く、此の世の權威を

掌る治者の臣たると共に、又た我が良心の至聖殿に在ます天帝の僕たるを得るなり。¹⁶⁾

ここでもスペンサーの学説を用いながら、私たちは忠誠心を別の主君へと移したが、このことは決して新旧の主君に対して不誠実な行為を意味するものではないとした。なぜなら、この世の統治者の臣であるゆえに、心の中に存在する帝の下僕となるためであると説明する。この主君を移したとは、明治維新のことを指していると考えるのが自然であろう。つまりは、封建社会から近代国民国家としての明治国家への移り変わりを正統なものであると評価している。

三つめに、新渡戸が「第十章 武士の教育」(英文「Education and Training of a Samurai」)の中で、武士と品性について述べている箇所に着目した。

武士の教育に於いて、最も重んずべきは、品性を確立するに在りて、細慮、知識、口弁の如き技巧の才能は、迥に其の後ろへに雁行せり。¹⁷⁾

武士は品格の形成を最も重視し、思慮、知識、雄弁などの技巧は品格ほど重視しなかったと述べている。武士が品格を養った方法については、「武士教育の過程は、主として、撃剣、射術、柔術、騎術、槍術、兵法、書道、倫理、文学及び、歴史の類なり」と述べられ、中でも「柔術及び書道を必須とする要旨は、多少之れが説明を加えざれば」¹⁸⁾とされている。柔術と書道には説明があるという。

以下では、柔術についての説明に着目した。

柔術は、即ちやわらかき術にして、之が簡単なる定義を下さば、即ち攻守の業

に、人体解剖の知識を適用したるものなりと云うを得ん。角力とは自ら其の類を異にして、筋力に頼るものに非ず。又た他の格闘の法と異なりて、毫も武器を用いず。其の法とする所は、敵の身体の某所を掴み、或は之を打ちて、麻痺せしめ、再び抵抗する能はざらしむるに在り。其の目的は、殺戮に非ず。唯だ一時、敵の力を奪って活動する能はざらしむるに在りとす。¹⁹⁾

武士の品性の修養に用いられていたという相手を傷つけない柔らかい武術の解釈は、実際の武士が習得していた武術とはかけ離れている。例えば、現在も山口県に伝わる「豊臣家、吉川家指南 伯耆流柔術」には、刺客を殺す動作までが組み込まれている。²⁰⁾そして、訓練の主たる目的は主君を守るためであり、現在の柔道などに見られるような品性の陶冶に重きをおいた修行ではない。

新渡戸がいう柔らかい武術を通じた品格の修養とは、19世紀中葉以降に西欧で誕生したスポーツ教育思想に基づく発想である。西欧で行われたスポーツ教育とは、パブリックスクールに通うエリート青年が、スポーツを通じてアマチュアリズムやフェアプレイなどの教養を身につけることにあった。新渡戸は、こうした西欧流の徳育教育のあり方がかつての武士の柔術の修行にも存在したかのように説明した。

以上のように、新渡戸の「武士道」論は、近代西欧社会において美德とされる倫理や道徳規範の概念が日本にも存在するということが西欧人に対して紹介することとなり立っている。そして、日本語版は、「武士道」の名の下に西欧流の「文明の精神」を啓発しようとする意図が伝わるものであった。事実、19世紀中葉以降に、西欧社会で重視されたフェ

アプレイやスポーツを通じた徳育教育が、まるで武士の修行の目的であったかのように紹介されていた。新渡戸が「武士道」と述べつつもスペンサーの学説を引用しながら明治国家体制を支持していることも、西欧観念哲学に沿った近代国民国家論への賛同と捉えることができる。すなわち、新渡戸の「武士道」論とは、近代国民国家としての徳性を有する日本を海外に紹介すると同時に、模倣すべき西欧の「文明の精神」を日本の伝統的な価値観として定着させるものであったといえる。

II 新渡戸稲造にみる「明治武士道」の普及

次に、「明治武士道」の普及について検討したい。新渡戸は、第一高等学校校長を務めていた時期と同時期に実業之日本社で執筆及び編集顧問として活動した。そこで、新渡戸稲造の実業之日本社での活動に注目した。

II - i 実業之日本社が果たした役割

新渡戸の『武士道』以降の執筆活動の中で、「文明の精神」の普及がどのようにして行われたかについて述べる前に、実業之日本社自体の社会的影響力に触れておく必要があるだろう。そこで、まず、実業之日本社について紹介したい。

実業之日本社は、現在も株式情報を中心とした経済雑誌であるが、出版史の中では、関東大震災によるバックナンバーの消失によって、史料的欠損もあったことから、これまであまり歴史資料として注目されてこなかった。馬静は、「これまでの研究や著作において、『実業之日本』と実業之日本社はほとんど評価されていない。というよりは、ほとんどそれらの対象となっていない」²¹⁾と指摘している。しかし、同社の雑誌は、明治期から大正

期にかけて販売数を伸ばした。その同社の印刷部数は、1906年には23万部、1907年には67万部、1908年には93万部、1909年には129万部²²⁾に達し、実業之日本社は1907年には、全国の雑誌の中でも発行部数において最上位をしめるようになっていた。²³⁾

1907年に開かれた雑誌『実業之日本』創刊10周年記念園遊会では、「政界・経済界・教育界・学会など七〇〇人を越える著名人が参加した。…中略…実業之日本社が確固たる地位を築いたということを示す歴史的な出来事でもあった²⁴⁾」とされているように、20世紀初頭において、同社は確かな社会的影響力を持ちえた出版社であった。

同社の発展の理由の一つには、雑誌『実業之日本』の初の臨時増大号として『成功大観』（1903年）を世に送り出したことにあった。初版は完売し、再版に再販を重ねても、ただちに売り切れる状態であった。雑誌『太陽』や『中央公論』もこの成功ブームを後追いつし、雑誌のコラムに「成功」の欄を追加した。「当時の人々は、近代社会の一定の展開の中で、新しい出口を求めていた。そのような時に〈成功〉という言葉が突如として湧き出てきて、それが一つの導きの糸となり、皆が〈成功！〉〈成功！〉と叫ぶように²⁵⁾」なると言われている。

また「成功」が突出したキャッチフレーズとなり、青年読者を取りこにしたと言われている。このようにして、実業之日本社は雑誌界、民衆に影響を与えながらその地位を確固たるものにしていく。馬は、「結果から言えば、〈成功〉はこの時期に、『実業之日本』によって“発明された”（ホブズボウム）ものといえる²⁶⁾」と述べ、さらに、他雑誌との差異として『『実業之日本』は〈品性〉の大切さも論じていた²⁷⁾』と説明している。増田の「成功」とは、出自に捉われず、品性を備えた青年が

成り上がる（成功する）ことができることを教えるものであった。品性を備えたものが、成功者になれるという考えは、英国で登場した新しいジェントルマンの思想であった。

村岡健次は、19世紀の英国の特色を「工業化の進展を背景に、ブルジョワ階級と労働者階級がしだいに勢力を拡大した」ことにあるとし、もう一つの特色を「ジェントルマンとノン・ジェントルマンをはっきりと区別する文化的身分制度が成立²⁸⁾」にみられると述べている。かつてのジェントルマンは身分的障壁により区分された世襲制のジェントルマンであったため、ノン・ジェントルマンがジェントルマンに成り上がることなど不可能であった。しかし、19世紀の後半になると、ジェントルマンになりたいノン・ジェントルマンが、パブリックスクールに通い、スポーツを通してアマチュアリズムを尊び、フェアプレーの遵守といった品性を備えることで、ジェントルマンとしての地位を獲得することが可能となった。世襲制ではなく、エリートスクールに通うことにより、品性を備えたものがジェントルマンになれるという19世紀の英国社会で起きた変革については、Ⅲ－iii「新士道」と「真のジェントルマン」において詳細に述べる。

実業之日本社から発信された成功者像もまた、人格において優れていた者たちであった。このことは、実業之日本社が、西欧流の成功者のあり方を伝える役割を果たしていたことを物語っている。

加えて、実業之日本社を語る上で、新渡戸稲造のかかわりは無視できない。新渡戸と実業之日本社との最初の出会いは、新渡戸が農学者として雑誌『実業之日本』に投稿したことであった。そして、1908年から読者にむけて「武士道」や「修養」について論じる。新渡戸は、同誌に「新時代に処する実業家の武

士道」を執筆して以来、ほぼ毎号投稿した。しかし馬によれば、この新渡戸の「通俗雑誌」への投稿には、吉野作造をはじめ各方面から強い批判の声があがったという。これに対して、新渡戸は「日本の現状に鑑み、最も大切なのは大衆教育だ。…聞けば工員達が一番読んでいる雑誌は『実業之日本』だということだ…これ自分が増田社長の要望に応じて執筆を決心した」と反論したという。²⁹⁾

増田は、新渡戸に編集顧問に就任して欲しいと申し出た。新渡戸が、「道徳観を養うことが肝要」であるという共通した考えを持っていたからである。新渡戸もまた、増田のことを「どのような階級に属する若者であっても、彼等が人生の目標を見出し、社会のよき担い手となるように手助けし、それによって将来強力な国家を作り上げることができると考えていた」と評価している。³⁰⁾ 増田は「強力な国家」の形成に関心を寄せ、世界から文明国と認められるために、「文明の精神」を普及することを雑誌刊行の目的とした。

新渡戸は、日本に「文明の精神」を啓発していく上で、増田が同様の価値観を有しており、普及する力に長けていると判断した。以上のように、同社の活動は、「文明の精神」の普及という目的を有していることから、「明治武士道」の普及を考察する上で重要である。

II - ii 新渡戸稲造の実業之日本社での活動

では、実際、実業之日本社と新渡戸とはどのような関係にあったのか。その中身を検討する事で、実業之日本社での新渡戸の活動とその目的を明らかにしたい。

新渡戸は実業之日本社の顧問に就任した理由を以下のように語った。新渡戸は、増田と何度か面会し、「社の主義方針等を聞き、僕が平素懐抱していた主義と相一致する」³¹⁾ ためだと述べた。そして、なぜ同社の顧問になっ

たかを五項目に分けて本誌で説明した。以下にその五つの理由を要約する。

(一) 新渡戸は、中学校を中退したもののや登校できなかった青年に教育する事が重要であると考えていた。しかし、現在学校以外で、青年教育する機会がない。学問を修めることのできなかった人に学識と徳藻を涵養させる機関もない。『実業之日本』は、発行部数が8万を越え、一部を三人が通読すれば、24万人が読むことになる。読者の範囲の広さはこれでわかるとした。また新渡戸は、以前書いた記事に手紙を寄越したものが非常に多いし、八百屋の丁稚から医学生まで幅広くきた。『実業之日本』はすでに社会教育を行なっていたと評価した。そして今回顧問となった理由も、この雑誌を通して、学問のない人に学問を与え、煩悶している人に、慰安を与えたいためであると述べている。

(二) 新渡戸は、専門の研究を公にする雑誌は相当にあるという。しかし、学者は卑近のことをいうと俗化すると言って喜ばない。俗人は分からないようなことを言われると高尚だと言って喜ぶ。これでは意味がない。高尚な説も卑近にして何人にも解り何人にも味わえるようにしなければならない。『実業之日本』は高尚なことを説かないで、卑近な何人にも解り易く、又何人も知らなければならないことを説いているため、新渡戸は賛同した。

(三) 日本の諺に猫に小判というのがある。西欧にも豚の前に真珠という諺がある。如何に立派なものでも使うことが

できなければ、何の価値も無い。だが、『実業之日本』の読者は真面目に読んでくれるらしい。批評的に中傷的にしないで、満腹の信用を持って読んでくれるらしいとし、新渡戸の下へ届く手紙はこれを証拠だててくれると述べた。また読者が知識は別として真面目であると評価し、更に熱烈な感情で読んでくれる。『実業之日本』の読者は多いというが、多い上に尚こういう人がいるということは、感激せざるを得ないところである。

増田が新渡戸のところきて「読者があまりに真面目なのでギビが悪くなった。関心するばかりでなく、一種の宗教のように信仰しているものもある」や「実業之日本を読んで発奮して成功したもの」、「自殺を思いとどまったもの」などの話をした。新渡戸自身が読者から受け取った手紙をみて、この話をもっともらしく思えたという。このような真面目な読者がいて、「僕のようなものの話を精読してくれようとする人がいるならば、僕も及ぶべきことをしよう」という気持ちになったとした。

(四) 新渡戸は、哲学は高尚な学問であるとするも、それを人生日常の事物に応用するのは実業であると説明する。『実業之日本』は高尚な原理は説いていない。また実業上の技術に関する精密なことを論じていない。しかし、実業に従事する人が心得ていかなければならないことを卑近に説いている。しかし、それは原理を説いたもので、之を行なえば、国も富めば個人も富むものである。日本が重大な負債を有する今日（日露戦争による負債）、実業家の修養を説いて国富の増進に努めている同誌により、我国実業の健

全な発達を切望するものであると、実業之日本社の方針を評価した。

(五) (新渡戸は増田と新聞雑誌に対する観念が同じであったために就任を決意した。しかし、新聞雑誌を卑しいものと考え、新渡戸の校長職などの品格を貶めると忠告する友人もいた。) しかし、増田は「いや、我々はその考えを一転させたいのである。記者の事業の賤しむべからざると」とし、雑誌刊行は「金儲けのためでない。金儲けをしたいなら他に多くの簡単な方法がある」、「我々は雑誌を編集するに自己の利益の念はない。読者の利益を願っている」と述べた。これを聞いた新渡戸は、利益を第一の目的としないで事業を目的とすることは、同感とする所であると賛同した。³²⁾

すなわち、新渡戸が編集顧問に着任した理由は、強力な国家をつくるために、読者を品性の面から啓発するという目的が増田と一致していたことにあった。そして、普及する上で明治後期から大正にかけて日本で最大の読者層を有した『実業之日本』が最適であると考えたためであった。雑誌『実業之日本』は、新渡戸が上で述べているように、「八百屋の丁稚から医学生」といった社会的エリートからそうでない若者までを啓発する上で重要な役割を果たしたジャーナリズムであった。

実業之日本社にみる新渡戸の執筆活動

次いで、実業之日本社による出版物を通じた新渡戸の「明治武士道」の中身を考察することにしたい。前述したように、新渡戸は、1908年以降は、『実業之日本』にほぼ毎号執筆しており、同年に実業之日本社の編集顧問に着任した。1908年の最初の論稿が5月15日

号の「新時代に処する実業家の武士道」であった。以下に示すように、そこでは、英語の名誉の観念Honourを「武士道」に置きかえて紹介している。

「廉恥と英語のオノアー」（オノアーは英単語の「Honour」であり、名誉を意味する。）

我が武士道とは、意味の頗る広い言葉であるが、約むると廉恥の一言に帰すると思う。体面を重んじ恥を知ることは、古の武士が最も意を用いた所で、若し其の体面を重んじることが出来ず、其の廉恥を傷けられることがあれば、切腹をして申訳をする。彼等には『死』ということよりも其の体面ということが大切であったのである。

英語にオノアーという語がある。日本では名誉と訳して居るから妙に響くけれども、是は日本でいう廉恥である。ただ廉恥といえば消極的であるが、オノアーといえば積極的の様に思われる。こうすれば、武士の体面を汚しはせぬか、ああすれば武士としての責任を空うすることはないか。常に消極的に廉恥を傷つけはせぬかとのみ思う。

英語のオノアーということが、こうすれば紳士の体面を保つことが出来る、ああすればオノアーを高むるという風に、常に積極的に人の行為を奨める様であるのと少し異う。

…中略…

武士道が不正をするな、廉恥を傷くる勿れとまで云ったが、一歩進めて善いことを行えといわなかったことは如何にも残念である。³³⁾

武士は名誉を守るために行動し、西欧では

名誉を高めるために行動するというように、たしかに日本の「武士道」における「廉恥」とジェントルマンシップの「Honour」の差異も示しているが、新渡戸は、結局のところ、後者の名誉を高めるための積極的な行動を推奨している。すなわち、西欧で理想とされたジェントルマンシップを推奨し、それが日本の「武士道」と類似しているとして、西欧的な価値観の啓発を同時に試みている。

新渡戸は、西欧流の「オノアー」あり方を説明した上で、理想の「武士道」の美德とは、「前に述べた廉恥を知るということは、武張った徳で堅苦しい所があるStern Virtue」という厳格な美德ではなく、「武士の情けというのは、此の厳格な徳が溫柔な方面に発露したもので、前者に対照すれば、Gentle Virtueである。武士道の精華はここにあることと思う」と述べ、西欧の行動規範が「武士道」の理想であると説明した。³⁴⁾ この西欧的な価値観こそ、新渡戸が広めたい教養であったと言えよう。

『修養』にみる「文明の精神」

新渡戸は、『修養』（1911年刊行）の中で、西欧人の学者によれば、文明とは「精力の貯蓄」であるとし、次のように解説している。「野蛮人には余裕もなければ貯蓄もない」³⁵⁾。次いで、彼は「第八章 貯蓄」にて、文明人としてのあり方を説く。「人が貯蓄を始めるのは、一にはその人に先見の明があるや否や」を判断できるからであると述べた。新渡戸が言う貯蓄とは、「後日の不足を補う為に、予め貯蓄する」³⁶⁾ ことにあり、先を見通す力と関係するとした。その根拠として、「スペンサーが言った如く、知能の発展は時間と空間に適應するものである。知能の程度が低ければ低きほど、時間に関する思想が短く、又場所に関する思想が狭い」³⁷⁾ とスペンサーを引

用し、「文明の精神」を分かりやすい言葉で伝えた。

さらに、「日本人と西洋人との間に非常に差異があることは、仕事をするに、この次は何、この次は何と、計画を立てると否にある」³⁸⁾と述べ、西欧の合理主義に言及している。そして、質素儉約、禁欲主義を含蓄する貯蓄の概念から「文明の精神」を説明した。新渡戸は、読者に文明国の国民として、どう行動すべきか、どのように考えるべきかを解り易く啓発している。さらに、貯蓄の概念について、「人には三段の種類がある。第一は余力あれば直ちに総てこれを濫用するもので、これ即ち最も劣等な徒である。第二は濫用することをおそれて、なるべく余力ない様にし、不足なるを喜ぶもの、これは中等の人」であり、「第三は、余力あれば尚更節度を守り、今日必要でないものは、他人或は後日のために之を貯蓄するもの、これは最上である」。「ここに達せない国民は、たとえ戦争に強くとも、永遠に強国として世界に誇ることは出来ぬ」³⁹⁾のであると主張している。

すなわち、西洋流の規範や概念を身につければ、日清・日露戦争に勝とうとも、文明国家として世界から認知されないことを新渡戸は強調する。そのために何を貯蓄するのか。新渡戸は「金銭、体力、知識、精神的勢力」⁴⁰⁾を挙げる。

「金銭の貯蓄」については、「日本人は概して金銭の貯蓄をけなし」たがり、「金銭を貯蓄しているといえ、如何にも小心な、意気地なしの如く推量」する。一方で、「乱費する者は、大胆で、偉い人の如く、人も褒めれば自分もその風にする」。しかし、「兵糧の続く間は、大言壮語して豪傑らしく振舞うが、一朝病気に罹るとか、不時の出来事で金の要ることが出来ると、今までの英雄豪傑がバタとなって仕舞う。その醜態は見られた様では

ない」と、批判した。⁴¹⁾ 新渡戸は、日本人は金銭の貯蓄を嫌う傾向にあると指摘した。しかし、先見の明なく、豪傑を気取ってただ浪費し、貯蓄をしないことは、恥ずかしいことであると述べ、貯蓄の重要性について教えている。

また健康の概念については、「体力の貯蓄」という言葉を用いて、近代的な健康の概念の普及について言及した。

「青年の中には一時の元気に任せて、蛍雪の苦を積むなどいって、乱暴な勉強をするものがある。粗食で、薄暗い燈下の下で、終日終夜詰めきりで勉強するものがある。その精神は誠に関心すべきであるが、之が為に体力を乱費し、他日之を利用せんとする大切な時に至って、役に立たなくなるものが、世間その例に乏しくない」⁴²⁾と、健康について教える。新渡戸は、健康を保持するために、「適度に運動し、冷水を浴びる等、普通に健康を保つに必要な衛生上の規則を守らねばならない」⁴³⁾と注意しており、運動や衛生といった概念を通じて、近代の健康の概念の説明を試みている。

こうした運動、健康や衛生の概念は、明治期に西欧から輸入されたものである。事実、明治期の日本では、「対外的独立の唯一の道として考えられた、文明化＝西洋化が絶対的な価値をもち」⁴⁴⁾、そして「西洋風俗に絶対的価値を認め…中略…裸体や片脱ぬぎ、入墨、男女混浴、の禁止をはじめとして、道路・交通・衛生・防火などきわめて広範囲にわたって禁止項目」⁴⁵⁾が決められた。また、明治の学校教育において体育が登場していることから健康の概念の普及が伺える。

『修養』は、『武士道』と同様に、新渡戸が理想とする若者の生き方や精神を啓発するものであった。新渡戸は、「太平洋の橋」となることで、外国の文化を日本に伝えることを

目的の一つとしており、⁴⁶⁾ 紹介した徳目は、近代化及び文明化を象徴するものであった。すなわち、西欧社会の「文明の精神」を日本人に広め、国家を成長させようとした。

新渡戸は実業之日本社を通じて「武士道」と表現して「文明の精神」を伝えたものもあれば、「修養」として伝えた部分もある。しかしながら、それらは共に「文明の精神」を解説するものであったため、多くの読者にとって「武士道」と同様の中身に映っていたのではないだろうか。

とりわけ、1908年に『武士道』の和訳本が発売されたことで、当時の読み手はすでに新渡戸を「武士道」論者として認識していた。

次に、編集顧問就任記事の次号（1月15日号）に着目したい。この論稿には、著名人からの声が掲載された。早稲田大学教授浮田和民は、「私の最も喜ばしく感ずるのは、博士の力によって、我実業社会に武士道的精神を注入せらるる」⁴⁷⁾ ことであるとし、昔の武士は勝つために嘘をついてよいという風習であったが、これは世界では通じない。日本の商人は見本と違う品を売りつけるなどの現状を嘆き、嘘をつかず、拳国一致して時間を守り、信用を尊ぶといった西欧流の規範が「世界的武士道」であると述べた。そして、「幸いにも新渡戸博士は日本の武士道にも精通し、西洋の武士道は特に深く研究せられており、西洋の文明の根本たるキリスト教の精神をも十分理解しているから、日本の武士道の欠点をうまく補い調和させて世界的武士道とし、それを実業社会に注入して欲しい」⁴⁸⁾ と期待をこめた。つまり、浮田は、新渡戸が普及させようとしていた「文明の精神」を「世界的武士道」と表現し、その鼓吹を新渡戸に期待した一人であった。

また新渡戸は、山方香峰『新武士道』（実業之日本社、1908年刊行）の序文を担当する

など、自身以外の「武士道」論にも関わった。さらに、雑誌『実業之日本』の紙面には、「武士道」の論稿が増加する。前述の新渡戸や浮田の「武士道」の論稿の他にも、小林富次郎「英人の武士的親切」（1908年4月15日号）、白露生「真の商売は武士道と両立する」（1908年5月15日号）、濱口瞻「余の実見せる英人の武士的精神」（1908年5月1日号）、末松謙澄「商業上に現われたる武士的精神」（1908年6月1日号）、菊池大麓「余の英国にて感じたる競争上に於ける武士道」（1908年6月15日号）などの「武士道」論が掲載された。

それゆえ、新渡戸は『武士道』の刊行以降も、執筆者かつ編集顧問として実業之日本社を通じて「明治武士道」を普及したといえる。次に、新渡戸と同じ志を持ち、新渡戸とともに啓発活動に努めた増田義一に着目したい。

Ⅲ 増田義一にみる「明治武士道」の普及

Ⅲ-ⅰ 増田義一の経歴

増田義一は、これまであまり着目されてこなかった人物である。しかしながら、新渡戸は増田を評価し、共に啓発活動に努めた関係者であった。また、大隈重信も増田の理解者であった。大隈自身が増田との関係を「吾人の朋友」と述べており、その両者の深い交友関係をみることができる。⁴⁹⁾ 増田は1912年に国民党より出馬し、衆議院議員に当選する。増田の政治活動は詳しくは不明であるが、馬よると、敬慕していた大隈重信を政治の表舞台でも裏でも支え続けたという。

1914年には、早大総長高田早苗と西洋諸国に周遊に赴いている。その際、イギリスで英国議会の傍聴し、感銘を受けたことが『思想善導の基準』に記載されている。⁵⁰⁾ 日本に戻ると、国民党と大隈内閣の間で論争になった

師団増設問題が生じていた。増田は大隈への恩義と政党に板ばさみになり、いったんは政界を引退した。この時増田は引退の辞として「余は欧米視察によりて得たる所を提唱し、…社会の革新に貢献する所あらん」と述べている。増田は、社会の革新に貢献するために、実業之日本社の紙面で、啓発活動を行なった。また彼の社会的信頼は高かったようで、1912年から1945年の間に衆議院に計8回当選し、衆院副議長も務めた。⁵¹⁾ 以上のような経歴と人間関係を持ち、出版業界を牽引した増田の書物を考察する事は、1900年代から20年代に紹介された「文明の精神」をみる上で重要であるように思われる。

Ⅲ－ii 増田義一の「明治武士道」論

増田が、読者の道德観を養うために刊行した書に、『青年と修養』（1912年刊行）、『大国民の根底』（1920年刊行）、『思想善導の基準』（1921年刊行）、『青年出世訓』（1925年刊行）などがある。彼の著書は、雑誌『実業之日本』や、その増大号に掲載された増田の論稿が再収録及び加筆されたものである。

増田は『思想善導の基準』の中で、「英国は礼儀作法の正しきを以て世界第一と称されている。文明の進歩と共に国民の礼儀作法も美化されねばならぬ」とし、「真の文明の精華は其の国民が日進の知識に富むと共に…中略…文明と逆行するが如き無作法の振舞多きを見て遺憾に堪へない」、「余は斯る方面からしても国民の品性を向上せしめたい」⁵²⁾ と述べており、英国の文明を伝えることを主たる目的とした。また、英国的な道德思想を奨励する際、次の二点に留意する必要があると述べている。

如何なる外来思想でも之を日本化することが必要である。即ち日本の立場を

忘れないで良く之を消化するのである。我々は自己が日本人である。日本人として世界列国の間に伍し、以て現代の文化に貢献せんとする自覚を有せねばならぬ。⁵³⁾

武士道と言えば直に古臭いと思う人もあろうが、その形式はたとえ古くとも其の精神は日本国民の精神の真髓である。この精神を深く味わい之を現代化することが最も肝要である。⁵⁴⁾

以上のように、増田は外来思想を日本化する必要があると考えていた。また時代遅れの「武士道」を現代化する必要があると述べ、「武士道」の再編を試みようとした。同書の中で増田は、新しい時代を担う若者の理想像を説き、その際「新士道」という言葉を用いている。「新士道」は、「現状と国体と合致し、国民性に適応し、新時代の新思想に適応しなければならない」とし、「日本の武士道及び西洋の武士道、英国固有文化である紳士道のそれぞれの長所を融合させたものが必要」⁵⁵⁾ と説明している。すなわち、日本の「武士道」に紳士道を融合させることで、新しい近代的な「明治武士道」を養おうとした。しかし、佐伯が指摘しているように、伝統的な「武士道」という概念自体が存在したのではない。増田もまた西欧流の「文明の精神」を「明治武士道」として紹介したといえる。

とりわけ、英国のジェントルマン像に倣って、日本人の品性の陶冶を求めた。例えば、「新努力主義」として以下のことを奨励した。「人類生活の根本意義から出発して、自発的に努力其のものを味わい、且つ楽しむもの」とし、「努力其のものを楽しむことが出来れば、努力は決して苦痛でもなく勿論苛役でもない。…中略…努力及び勤労を神聖と称する

のである。卑しい意味は少しも含まれていない⁵⁶⁾と述べた。品性の陶冶を説きながら自発的に努力を行い、それを苦痛とせず、勤労を神聖なものだと教える、「新努力主義」は、勤労の教説を想起させるものがある。⁵⁷⁾

また、英国のアマチュアリズムやアスレティシズムにおいて重視された協同の精神を紹介している。増田が理想とする社会組織には「ソリダリティー即ち連帯協同の精神が天然の原則であり、礼儀、規律、秩序、公德もこの範囲に入る⁵⁸⁾と、英語を用いながら協同の精神が必要であると説明した。加えて、「社会的に生活する以上は連帯精神が最も必要である。然るに従来日本人にはこの大切な連帯精神が欠乏して居る。協同一致出来ぬのも、公德心の発達せぬのも、時間励行の出来ないのも、一はここに原因している⁵⁹⁾と述べ、これからの日本人は連帯精神を意識し、社会生活の中で時間を守ることなどのモラルを守っていかねばならないと説いた。

また増田の書には、英国の重要なスポーツ規範である「アスレティシズム」を連想させる論述も存在している。アスレティシズムとは、村岡建次によると、「集団スポーツを人格陶冶のため有用な教育手段として重要視する態度のことで、これら競技形式の集団スポーツは、男らしさ、忍耐力、協調的集団精神、フェアプレイの精神を養うものと考えられた⁶⁰⁾。以下には増田の書の『青年出世訓』の一節を示しておきたい。

剛健の気象を養うには、青年の身体を強壮ならしむるが重要である。体質強壮なれば外部に対する抵抗力強く、剛健になる。英米独の教育を見るに、頗る体力養成に重きを置いている。彼等の大学に於ては運動遊戯を奨励し、学生の体育に注意することは邦人の想像以外である。

英国が少年義勇団を組織して以来、この事業は全欧を風靡したが、其の目的たる社会の悪風に感染せず、種々の危険思想に誘惑せられざる剛健の気風を養はんが為である。入団の時、忠君愛国、規律確守、公共のための自己犠牲として尽すという三か条を宣誓せしむるのである。

用語に多少の相違あるも、その実はわが武士道と合類する点が多い。我が武士道の教育は夙に欧米に研究されていたが、彼等は今や新しき形を以て武士道の精神を採用せんとするのである。⁶¹⁾

ここで注目したいことは、英国のスポーツ教育思想であるアスレティシズムが強調した剛健の気風を養うために、西欧の学校体育と少年義勇団ボーイスカウトを紹介している点である。また、英国ボーイスカウトの三か条として、「忠君愛国」、「自己犠牲」、「規律確守」を宣誓すると説明している。この三か条は、英名では「loyalty」、「order」、「self-sacrifice」にあたり、アスレティシズムの中で重視された規範であるが、「武士道」規範のように紹介した。⁶²⁾すなわち、増田の奨める剛健の気風を身につけることの実際は、「武士道」の獲得ではなく、アスレティシズムにみられる規範を身につけることにあった。日本の伝統的な概念とされる「武士道」という言葉を用いて解釈し、新しい「武士道」としてアスレティシズムに通じる精神を日本文化に内包しようとしたように思われる。続けて、増田は剛健の気風を得るために必要なこととして以下の三点を説いた。

青年の留意すべき三要点

余は武士的精神の鼓吹と共に青年自身の特に留意を促したいことがある。

其の一は、…中略…東西の偉人の一代

は総て剛健の気を以て一貫している。…之を読み之に私淑する者は知らず知らずの間に多大な感化を受け、剛健の気象を自ら勇起するを覚ゆるであろう。

其の二は、山野を跋涉して不屈の体力を養うことである。…青年は剛健にあらざれば、懦弱に流れるものである。跋涉は能く懦弱の悪風を一掃するに足ると思う。

其の三は、常に剛健の気象を養うことに留意するのである。聞くところによれば近時徴兵検査に於ける我国壮丁の体格は低下の傾向にありと。又学生の体質も一般に虚弱に流るるの風ありと。…洵に国運の成長に関する大問題である。

聞く所によれば近時徴兵検査に於ける我国装丁の体格は低下の傾向ありと。…中略…世界に対する日本の立場を理解するものは、今の青年の双肩にかかれる責任の重大なること空前なるを感ずるであろう。これを感じると共に、青年が空しく煩悶すべき時にあらざるを覚ゆるであろう。是に於て、余は世の父兄も教育者も、剛健の気性を青年に鼓吹するに力めんことを望む。⁶³⁾

増田は、剛健の気風を養うために、「武士道」を引き合いに出しつつも、その中身は武道や弓道ではなく、「山野を跋涉」することと述べている。加えて、運動で体を鍛えることは国運に関係すると述べ、運動と国家の発展を結びつけて奨励している点は、アスレティズムと一致している。そして、父兄や教育者が、青年に剛健の気性を鼓吹して欲しいと期待した。当時の教育における「山野を跋涉」する行為は、行軍や遠足（と運動会）に相当する、西欧体育の中身であり、アスレティズムの中心をなした集団スポーツと同様に国

力を補強する帝国主義下の集団訓練として共同、克己、忠誠心を育む同一の働きをなした。

このように、増田の主張は英国的規範を自国の「武士道」に置き換えることで、読者が、英国規範を日本の伝統的な規範として違和感なく受け入れられる構造を用意するものであった。次に、ここで増田のいう「新士道」とSamuel Smiles(サミュエル・スマイルズ)の言う「真のジェントルマン」の類似性について比較しておきたい。

Ⅲ－iii 「新士道」と「真のジェントルマン」

増田が、英国文化を受容し、新しい国民を作り上げようとしたときに目指した理想像が、『実業之日本』や彼の著書を通して紹介された。増田は、『指導善導の基準』の中で、「新時代の新思想に適應するもの」が必要であるとし、「新士道の出発点はここにある」⁶⁴⁾と述べた。「新士道」とは、武家社会に存在した階級構造を批判し、四民平等及び、男尊女卑否定の立場をとり、特権階級の規範ではなく全ての若者を対象とするものであった。次に、人格を強調し、教養のある人物を求めた。Richard Holt(リチャード・ホルト)によるとアマチュアリズムの重要な要素にはキャラクター(人格)がある。⁶⁵⁾

また増田の「新士道」は、実業によって富を築く近代資本主義の倫理を受け継ぐ「成り上がり者」を重視している。彼の理想とした成功者とは、「自力にて成功した富者」⁶⁶⁾であり、その富は「清富」を築いたものであった。増田のいう「成り上がり者」と「清富」とは、欧州大戦特需や株式、米相場などによって成長した「成金」や、高利貸しのような「他人の困難に乗じて不当の高利」をとるような人間ではない。また、「親譲りの富者。華族、豪農、豪商等自己が大なる努力を払わずして、祖先より財産を譲られたもの」⁶⁷⁾でもない。

大切なことは、「清き富みは如何なるものであるか、正しき手段と目的とを以て積める富を称する」のであり、「人格の光は能く富の力と調和を保ちて世の尊敬を博する」⁶⁸⁾ ことであった。すなわち、正しい事業を行い、品性正しくある人間が増田のいう真の「成功者」である。

人格が高尚な若者が、社会的に成功すると説いたのは、増田だけではない。元は英国人のサミュエル・スマイルズの『セルフヘルプ』にみることができる。増田は、臨時増刊した『処世大観』でスマイルズに関する特集⁶⁹⁾を組んでおり、スマイルズに関心があったといえる。

そこで、表1には、村岡による、英国の19世紀のクリスチャン・ジェントルマンの時代のスマイルズが奨励した「真のジェントルマン」について示した。19世紀以前の正統なジェントルマンとは、封建社会における特権階級の貴族であり、生まれや家柄によって構成されていた。しかし、「真のジェントルマン」は、19世紀における中流階級の台頭によって生じたものであり、成り上がることでジェントルマンになろうとした集団である。そのため、「真のジェントルマン」を目指すものは、ジェントルマンが通っていたパブリックスクールで学ぶことが重要であった。そこで、国家を

担うジェントルマンに成長するために、キリスト教やスポーツ規範などを身につけた。こうした青年の姿を描いたのが『トム・ブラウンの学校生活』である。すなわち、英国の青年がパブリックスクールで学んだ徳義が、表1の「理念の性格」に対応している。

例えば、「理念の性格」の正直や公明正大、剛直とは、アソシエーション・フットボール(サッカー)にオフサイドルールが形成した過程に見ることができる。中村敏雄によれば、「密集から〈離れていく行為〉や〈離れている〉行為が〈よくない〉行為とされ、やがて禁止されるようになった理由としては、第一に、それによって〈突進や密集〉の少ないフットボールが行われるようになり、フットボールの真髄でもあり、また楽しみや面白さの中心でもある〈男らしさ〉を示すプレーがみられなくなる」、「第二に、フットボールを〈一点先取〉というルールで行われる競技として受け継いでいく以上、この一点が容易に得られないようなルールや技術構造のものにしておく必要があった」⁷⁰⁾という。このように、容易に得点できるような「狡猾な行為」は、排除していった。それが、まさに「真のジェントルマン」たる素養であった。

次に、「文化的伝統」にみられる「筋肉的キリスト教徒」とは、英国のエリート教育機

	階級的基盤	階層関係	理念の性格	教養	文化的伝統
正統なジェントルマン	●上流・支配階級 ●有閑・消費階級	生まれ・地位・家柄	消費者階級の理念	人文主義 (ジェントルマン教育)	「ギリシャ主義」 コリンシヤン (大らかで、贅沢放蕩三昧の生活)
真のジェントルマン	●中流階級以下 ●産業階級 (注・下層階級は対象ではない)	「成り上がり者」	「生産倫理」の投影 公明正大・自制堅忍・剛直・正直・「勤労の教説」・「忍耐・不屈・協同の精神」 「節約論」	「実地の経験」 (自己教養)	「ヘブライ主義」 (プロテスタンティズム) 筋肉的キリスト教徒

表1 「真のジェントルマン」の対比

出典：村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』（ミネルヴ書房、1980年、209頁。）

関であるパブリックスクールから輩出されたエリートがスポーツ界を席卷するだけでなく、筋肉主義的キリスト教徒と呼ばれ、筋骨たくましくあることがエリートとの素養となり、社会的淘汰の構造が、支配階層となる社会的エリートを創出することに関わったとする優生社会学の立場が反映された帝国主義的理念であった。

表1に対応し、表2には「新士道」の規範の中身が英国の規範を啓発し、スマイルズの言う「真のジェントルマン」と同様に、品性の高尚な「成り上がり者」を重視していたことを示す。

村岡健次によると、「真のジェントルマン」は、世間に一般に知られた正統なジェントルマンとは著しく、いや対蹠的といつていいほどに異なるもう一つのジェントルマンであった」とし、「人生最高の目的は、男らしい人格を形成し、できうるかぎり肉体と精神——知性、良心、感情、魂——を最善に発達させるということである。…中略…知性、公共の精神、道徳善もまた力であり、それらの方がはるかに高貴なものである」ことがスマイルズの思想の骨組みである。⁷¹⁾ではどのような人間が「真のジェントルマン」なのであるのか。村岡によると、「偉人中の偉人」は「成り上がり者」であり、「理念の性格」で掲げたジェントルマンとしての素養である品性を備えたものであった。

そこで、増田の「新士道」と比較するために、表1の項目に合わせて、表2 新士道の

理念を作成した。

「真のジェントルマン」と「新士道」との最大の共通点は、品性を備えたものが「成り上がりもの」になれる点である。それゆえ増田がスマイルズのいう「真のジェントルマン」を日本化して、「新士道」としたと考えられる。

また「理念の性格」についても共通する規範が多く見られる。そこで、「真のジェントルマン」で掲げられている理念の性格を、増田がどのように紹介したのかに着目した。

「生産倫理」について、増田は「倫敦にローゼンと云う日本最良の商人がある。…顧客の多くが日本品の不正を指弾した為に、彼の商売も少なからず打撃を被った」、欧州大戦に際し、「粗悪品を送った為に一層信用を失墜し、痛く英人の感情を害してしまった」と日本商人の倫理観に対し苦言を呈し、「由来信用を生命とすべき商業家に、誠意の無いのは至大の欠点であって、新時代の新商業家は根本的に其の精神を改造しなければならない」⁷²⁾と西欧社会に通じる倫理観を喚起した。「生産倫理の投影」という意味では、実業家として一代で成功をおさめた増田が品性の理念を経済雑誌である『実業之日本』の紙面で述べていることに相当するだろう。

「自制堅忍」は、「自制心」として紹介しており、「自己支配セルフコントロールのできない人は、自身の主となることが出来ない人である」、「自制心なきものは情欲その他の悪徳を制すること能はずして墮落するものである」とし「新士道としては殊に自主自製の精神を必要とする」⁷³⁾

	階級的基盤	階層関係	理念の性格	教養	文化的伝統
新士道	四民平等	エリート、成り上がりもの、一代で成功するもの	生産倫理・連帯協同の精神（ソリダリティー）・高德・ボランティア・「生産倫理」・公明正大・自主自制・忍耐・正直・勤労の教説・協同の精神	実質的人間価値（教養・修養）	不明

表2 「新士道」の理念（船場作成）

と、情欲に耐え、自己を律する精神が必要であると述べている。

「剛直」は、前述した「剛健の気象」にあたるが、『思想善導の基準』の中で言及されていない。「不屈」についても、個別に言及されていない。

「忍耐」について、増田は富を得るために必要な要素であると「明敏、勤儉、熱心、忍耐、敏活、果敢等の性質」は、「到富の要素を為している」と説明した。⁷⁴⁾

「公明正大」は、米国の富豪ラッセル・セージが実業家として成功した理由を彼の人格が高尚であり、「自己の財産の一ドル一セントと雖も皆相当の理由ありと理由ありと主張するは、其の手段公明正大にして附仰天地に恥じぬからである。他人の説明の出来ぬ金は不正にして濁った所に相違ない」⁷⁵⁾とし、西欧の偉大なる成功者は公明正大な商売を行なっている事を伝えた。

「協同の精神」は、前述の「連帯協同」のなかで紹介されている。

「正直」について、増田は、日本人が「虚言は左迄罪悪でないと思う思想」を持っているとし、「道徳心の低級なる社会に於いては虚言を罪悪と思わぬ」とし、殖民地支配された国家の公民は嘘が多いゆえに、「虚言は文明の程度に比例する」⁷⁶⁾と述べた。つまり、文明国家の国民として「正直」でなければならないと提言した。

「勤労の教説」については、前述の「新努力主義」の中で、職業を神聖化し、自己の成長につなげることを理想とする勤労の教説を説いている。

「節約」については、「富に対する道徳訓練」として、富の使い方について言及しているが、節約を示す文章は示されていない。

以上のように、増田が奨励した「成功者」の姿とは、西欧流の品格を兼ね備えた人物で

あった。このことは、「真のジェントルマン」と同様のものであり、かつ「理念の性格」も類似している。19世紀以降に英国で登場した「文明の精神」である「真のジェントルマン」を「明治武士道」として普及させた役割を果たしたといえる。

増田は、英国規範を兼ね備えた若者を育てることを目的として『実業之日本』を通じて「新士道」論を執筆した。そしてあたかも、英国的規範が、自国に元来存在した規範のように紹介し、「紳士道」と「武士道」との融合と述べることで、英国精神を日本の伝統文化として読者に啓発した。すなわち、増田の「新士道」論とは、英国規範を日本的に受容するものであった。新渡戸稲造と同様に「文明の精神」を「明治武士道」に置きかえながら、文明国家にふさわしい国民形成を促すものであった。

以上のように、新渡戸と増田の活動の果たした役割を検討すると、彼らは「文明の精神」を、「明治武士道」の概念を通じて普及させたといえる。次に、雑誌『実業之日本』に掲載されたその他の「明治武士道」に注目したい。

IV 雑誌『実業之日本』にみる「明治武士道」の普及

新渡戸と増田が、西欧流の「文明の精神」を「明治武士道」として普及させようとしたことは、これまで見てきたとおりである。加えて、『実業之日本』の紙面においても「武士道」を普及しようとする知識人の論稿が掲載された。そこで、どのような「武士道」論が掲載されたかを考察したいと思う。

フェアプレイと「武士道」

衆議院議員濱口巖は、ケンブリッジ大学で

の留学経験から「余の実見せる英人の武士的精神」(1908年)を投稿している。

『英人の紳士道と我国の武士道』

アイアム、エ、ゼントルマン(我は紳士なり)と言う一語は恰も「天川屋儀兵衛は男で御座る」というのと、同一なる重味ありて、其の裏には虚言を言わぬというとも、高尚なる品性も、公明正大と言う事も、勇気も、礼儀も、不撓不屈の精神も、人倫五常の道も、何も彼も皆な含まれて居るので、英人は「彼はゼントルマンでない」と云る事が、社会的に死刑の宣告を受くると同様に感じて、只其の後れざらん事のみ力むるのであるが、我国の其の昔、武士の一語に身命を賭けたのと、其の状毫も変りないのである。⁷⁷⁾

上記は、ジェントルマンシップと「武士道」の同一化を図ろうとしている。濱口は、英国という先進国に留学したことで、ジェントルマンシップを理想とした。そのため、英国人が重視した品性である公明正大、勇気、礼儀といった徳が、「武士道」の徳であると説明している。また、フェアプレイに関する叙述もある。

『英人は彼方に向いて居る兎は撃たぬ』

私が英人の気風に関し最も感心するのは、その公平^{フェアプレー}ということである。例えば、英人が獵に行く、兎が彼方に向いて伏して居るを見付けても、決して其れを撃たぬ。必ず人が来たということに気が付いて、逃げ出す時でなければ其れを撃たぬのである。

…中略…

此の一例に依って英人が禽獣の小なる

ものに対して、尚且つ双方同一の地歩に立ちて、公平^{フェアプレー}を為すの用意を見るべく、況んや人事の百般に対しては、一層適切に此の武士道精神^{ジェントルマンシップ}を發揮して居るのは云ふまでもなく、誠に美しい事である。

…中略…

我が上杉武田の両将相戦う時も、塩を送って敵の欠乏を慰めたといふ美談もある。…中略…。男らしい気風の致すところで、実に桜花国の武士の精神は此くまで床しい所があったのである。英人が政治、商業其の他に關し戦闘するその態度は、誠に此の如しである。⁷⁸⁾

上記では、英国人が油断している兎を撃たないという狩猟のスタイルを「フェアプレイ」として紹介している。続けて、それは日本人も古来から有していた価値観であると述べている。しかも、それを「武士道精神」であると表現しながら、ジェントルマンシップのルビを付している。

また上杉と武田の故事の真偽はさておき、重要なことは、江戸時代において、その評価は分かれたかもしれないことを、美談にしている点である。ジェントルマン階級が理想とした徳義であるフェアプレイの精神に似通っている話であり、引き合いに出すには十分な中身だからである。

『武士道』にみる英国スポーツ規範

これまでも示してきたように、西欧流の「文明の精神」の関係を語る際に、スポーツ教育を通じた人格形成は重要である。例えば、近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンはオリンピックを創始する際に、英国流のアマチュアリズムを最も重視していた。彼は、「オリンピックの国際主義的性格を主張」し、「オリンピック理念を普及させ、

その啓蒙の光を広める」⁷⁹⁾ ために、世界各地でオリンピックを開催する。その際に、クーベルタンは英国のパブリックスクールで用いられていたスポーツ教育思想をオリンピックの理想に反映させた。人格陶冶とスポーツ教育を結び付ける思想は、世界的潮流であった。

日本においても、「武士道」の表現が用いられながらスポーツによる人格教育が行われた。明治期にスポーツが盛んであった東京大学、第一高等学校での運動会開催に積極的に関与した菊池大麓は、『実業之日本』の中でスポーツ規範を「武士道」として紹介している。菊池は、自身の英国の留学経験から「英人の気象に就て、最も感じた事の一つは、英国で云うFair Playである」とし、「競争上に於ける我国の武士道と大層よく似て居る」⁸⁰⁾と説明することで、英国のスポーツ規範を「武士道」として紹介した。

まず、「一体競技という事は、単純なる娯楽及び体育の奨励という様な事以上に、人格修養という重大な意味を持っている」⁸¹⁾と、西欧流のスポーツ教育の価値観を示した。修養される規範として、「勝っても男らしく勝つ、負けても男らしく負ける」と「男らしさ(マンリネス)」を紹介した。その例として、英国のオックスフォードとケンブリッジのボート競走を例にあげた。

マンリネスとは、英国のパブリックスクールにおける教育思想であるアスレティシズムの成立とともに、学生に涵養された徳性であった。これについて、村岡健次は、『トム・ブラウンの学校生活』の主人公、トムはラグビー校で、たくましく男らしいジェントルマンに成長していくとし、彼の成長は、「丈夫な身体の礼賛、スポーツの奨励、男らしさの宣揚、英雄崇拜の是認といったことがらを意味するもの」であった⁸²⁾と解説している。スポーツによって涵養される男らしさとは、パ

ブリックスクールの学校生活の中で尊ばれた特別な価値観であった。

次に、最後まで全力で戦い抜くことを伝えた。ボート大会で、「オックスフォードの敗戦は遂に挽回されない事が分かった後でも、同校の選手は泰然として最良の働きをあらわして居たのは、一段の光彩を発揮していた」⁸³⁾と、最後まで全力でプレイすることの素晴らしさを伝えた。これは、英国では「ブラック」と呼ばれるスポーツ規範に相当するが、菊池がなぜこのことを紹介したかということ、日本人に備わっていないスポーツ規範であると実感していたためであるとされている。このことは雑誌『運動界』にて、東大のボートレースにおいて、先頭のゴールの号砲になると総ての艇が漕ぐのをやめる。それは、「甚だ不体裁である」とし、「ストレンジと云う英人が大学の競漕会も席に此のことを終止気にしました。それは英人の目から見ると、氣に障って堪らないのである」⁸⁴⁾と述べている。

最後に、「フェアプレイ」について、「所謂正々堂々たる君子の争いで万事の競争をやるという事は、是非日本にも一般に行われる様にした。自分の言わんと欲する処世上の武士道とは即ち是れである」⁸⁵⁾と述べ、明らかに「武士道」そのものとして推奨した。

英国に二度も留学し、新たな文化に触れたはずの菊池が英国のスポーツ精神を単純に伝統的な概念である「武士道」に置きかえることは、時代の精神に逆行するように見える。しかし、そうではなく、菊池があえて西欧流のスポーツ精神を「武士道」に置きかえて普及させようとしたと考えれば、わかりやすい。すなわち、このことは、日本では、スポーツ教育によって修養された西洋伝来の規範が、「明治武士道」として普及されたことを物語っている。

以上のように、新渡戸や増田、実業之日本

社の刊行物から西欧論者の「明治武士道」論が発信された。共通する点は、日本が文明国家としての品性を育むために、西欧の「文明の精神」を「武士道」として広めようとしたことにあった。

結語

新渡戸稲造の「武士道」論とは、「創られた伝統」というべきものであり、その内実は「西欧流の「文明の精神」を「武士道」として紹介するものであった。とりわけ、日本で出版された和訳版『武士道』は、西欧の道徳観などを日本的な言葉に翻訳することで、あたかも伝統的な美徳を解説するものとして日本人に紹介された。しかし、新渡戸の真の目的は、西欧諸国から日本が文明国家として認知されるために、国民に「文明の精神」を普及することにあった。

その活動は、『武士道』の出版以降も実業之日本社の編集顧問及び執筆者として継続された。新渡戸の執筆活動において、重要な役割を果たした人物が増田義一であった。彼もまた国家の発展のために「文明の精神」を世に広めなければならないと考えていた人物であり、その思想は新渡戸と一致した。事実、当時すでに『武士道』の著者としての名声や、第一高等学校校長職という立場にあった新渡戸が、世間に名を売ろうとする必要はなかった。むしろ、新渡戸の名を付すことで、『実業之日本』が世間の注目を得ることが出来た。それにも関わらず、増田に協力したことは、彼らの理想が同じであったためであったと考えられる。つまり「文明の精神」を普及させることで日本を文明国家へと成長させることを共同の目的としていた。

新渡戸と同じ「強力な国家」をつくるという理想を持った増田が啓発した道徳観は「新

士道」であった。増田は、「新士道」とは、「武士道」とジェントルマンシップを合わせたものと説明している。しかし、実際は伝統的な「武士道」の価値観を紹介するのではなく、英国流のエリートの品性を伝えた。それは、スマイルズが言うところの「真のジェントルマン」の模倣であり、英国流の「文明の精神」を説くものであった。

新渡戸の実業之日本社での活動を賛辞した浮田もまた西欧流の「文明の精神」の普及を必要と考えていた知識人であった。浮田が新渡戸の「武士道」を「世界的武士道」と呼び、新渡戸の活動に祝辞を送ったのは、西欧社会の論理である「文明の精神」を啓発出来る第一人者と考えたためであった。また、新渡戸が同社で活動を始めると紙面には「武士道」の文字が並んだ。こうした事実からも、西欧流の「文明の精神」は、日本に普及するさいに「武士道」として世に拡大したと考えられる。

加えて、西欧流のスポーツを通じて形成される規範が「武士道」として紹介された。特に、フェアプレイは、新渡戸や菊池らが「武士道」として解説しており、嘘や騙すという卑怯な行為を排除し、正々堂々とした態度を「武士道」の重要な美徳であると教えた。このことは、現代にも見られる正々堂々としたスポーツ観が、「武士道」的として解釈される根を形成した可能性を示唆していよう。『実業之日本』の紙面に掲載された「武士道」論もまた西欧流の価値観に基づいて紹介された「明治武士道」であった。

以上のように、明治期以降に、軍事や技術などが西欧化する中で、西欧流の道徳観を備えた国民を形成する必要があると考えたのが新渡戸や増田であった。彼らは、日本が文明国家として西欧に認知されるために、「文明の精神」の普及を行なった。内実は「文明の

精神」であるが、それを日本の伝統のように紹介することで、「明治武士道」論が形成された。そのような方法は、日清・日露戦争期を通じて、対外的な防衛の必要性が生じ、国内に向けては保守的な文化ナショナリズムが勃興した社会情勢下にあったことを思えば、

巧みな手立てであったと分析できよう。この西欧流の解釈に基づいた「武士道」が社会に普及する上で、新渡戸稲造や増田義一、実業之日本社が一定の役割を果たしていたといえるであろう。

註)

- 1) このことは、佐伯真一『戦場の精神史』(NHKブックス、2004年)や菅野覚明『武士道の逆襲』(講談社現代新書、2004年)の中で主張されている。また「明治武士道」という表現は、菅野によれば、明治の半ばを過ぎたころから、言論の世界のなかで「武士道」という言葉が大流行したという。武士はすでになく、自らも武士ではないのにもかかわらず、自分たちの思想は「武士道」であると唱えるものたちが、ひきも切らずにあらわれてくる。この現象と思想を「明治武士道」と呼んだと説明している(菅野覚明『武士道の逆襲』講談社現代新書、2004年10月、232頁。)
- 2) 佐伯真一『戦場の精神史』NHKブックス、2004年、267-268頁。
- 3) W.G.Beasley, *The Rise of Modern Japan*, Tokyo: Charles E. Tuttle Company, 1990, Chap. 6. "Cultural Borrowing", 1860-1912, pp.84-101
- 4) 勝田政治「維新の三大改革」田中彰編『明治維新』吉川弘文館、1994年、163頁。
- 5) 菅野、前掲書、260頁。
- 7) 佐伯、前掲書、259頁。
- 7) 新渡戸稲造(櫻井鷗村訳)『武士道』丁未出版、1908年、239頁。
- 8) 同上、11頁。
- 9) 新渡戸稲造(岬龍一郎訳)『武士道』PHP文庫、2005年、22頁。
- 10) 櫻井鷗村「序」新渡戸稲造(櫻井鷗村訳)『武士道』、16頁。
- 11) ピーター・マキントシュ(水野忠文訳)『フェアプレイ』ベースボール・マガジン社、1983年7月、序文v頁。
- 12) 新渡戸、前掲書、11-12頁。
- 13) 同上、116頁。
- 14) 新渡戸稲造(岬龍一郎訳)『武士道』、99頁。
- 15) 新渡戸稲造(櫻井鷗村訳)『武士道』、116-117頁。
- 16) 同上、118頁。
- 17) 同上、123頁。
- 18) 同上、125頁。
- 19) 同上、125-126頁。
- 20) 中島篤巳編著『伯耆流柔術秘伝絵巻』マツノ書店、1989年。
- 21) 馬静『実業之日本社の研究 近代日本雑誌史研究への序章』平原社、2006年、4頁。
- 22) 同上、78頁。
- 23) 同上、87頁。
- 24) 同上、88頁。
- 25) 同上、49頁。
- 26) 同上、51頁。
- 27) 同上、52頁。
- 28) 村岡健次『「アスレティズム」とジェントルマン』村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年、236頁。
- 29) 馬、前掲書、96頁。
- 30) 同上、98頁。
- 31) 新渡戸稲造「余は何故実業之日本社の編集顧問となりたるか」『実業之日本』実業之日本社、1909年1月1日号、5頁。
- 32) 同上、5-11頁。
- 33) 新渡戸稲造「新時代に処する実業家の武士道」『実業之日本』実業之日本社、1908年5月15日号、25頁。
- 34) 同上、26頁。
- 35) 新渡戸稲造『修養』実業之日本社、1911年8月、265頁。
- 36) 同上、266-267頁。
- 37) 同上、167頁。
- 38) 同上、268頁。
- 39) 同上、273頁。
- 40) 同上、273-274頁。
- 41) 同上、275-277頁。
- 42) 同上、184-196頁。
- 43) 同上、295頁。
- 44) 勝田、前掲書、163頁。
- 45) 同上、178頁。
- 46) 鈴木範久編『新渡戸稲造論集』岩波書店、2007年、323頁。
- 47) 浮田和民「博士は世界的武士道鼓吹の最適任

- 者』『実業之日本』実業之日本社、1909年1月15日号、17頁。
- 48) 同上。
- 49) 馬、前掲書、111頁。
- 50) 増田義一『思想善導の基準』実業之日本社、1921年、付録。
- 51) 馬、前掲書、127-131頁。
- 52) 増田、前掲書、312頁。
- 53) 同上、23頁。
- 54) 同上、33-34頁。
- 55) 同上、184頁。
- 56) 同上、140-141頁。
- 57) 労働を神聖なものと考えた思想は、資本主義の精神としてマックス・ウェーバーによって説かれ、ラインハルト・ベンディクスによれば、「労働の苦しさそれ自身が、恩寵の確信にいたるための手段とされた。近代資本主義の創成期には、このようにして、没主観的で機械的な労働、低賃金と搾取が、宗教的な光明をあたえられ、合法化されたのである」と説明されている。(ラインハルト・ベンディクス(折原浩訳)『マックス・ウェーバー—その学問の全体像』中央公論社、1966年、69頁。)
- さらに、村岡健次によれば、スマイルズの思想は「経済的な独立を介して、節約、勤勉、正直、周到といった〈勤労の教説〉(それは、ほぼウェーバーの「資本主義の精神」に当たるといえることができる)から人格形成にいたる、いわば二段構えの構造」になっていたという。(村岡健次『ヴィクトリア時代の政治と社会』ミネルヴァ書房、1980年、200頁。)
- 58) 同上、320頁。
- 59) 同上、316-317頁。
- 60) 村岡健次『『アスレティシズム』とジェントルマン』村岡健次、鈴木利章、川北稔編『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』ミネルヴァ書房、1987年、228頁。
- 61) 増田義一『青年出世訓』実業之日本社、1925年、126-128頁。
- 62) 村岡健次によれば、アスレティシズムは、「新国家体制を担う未来のエリートたちのための教育イデオロギー」であり、「公然と帝国主義と結びつき、完全にその手立て、ないし、そのイデオロギーの一部となった」。(村岡、前掲書、243頁。)
- こうした中で、アスレティシズム教育によって登場した筋肉的キリスト教徒であるKingsleyの作品である『*Westward HO!*』(1855年刊行)や『*Two Years Ago*』(1857年刊行)などは、阿部生雄によれば、「若者の愛国心を覚醒し、帝国主義的侵略戦争を正当化する作品」であり、帝国主義と結びつく概念(自己犠牲、忠君愛国、勇らしさなど)が誇張された。(阿部生雄「筋肉的キリスト教」と近代スポーツマンシップの理念形成—チャールズ・キングズリーを中心として—』『岸野雄三教授退官記念論集 体育史の探求』岸野雄三教授退官記念論集刊行会、1832年3月、133頁。)
- 63) 増田義一『青年出世訓』実業之日本社、1925年、123-124頁。
- 64) 同上、312頁。
- 65) リチャード・ホルト(池田恵子訳)「アマチュアリズムとイングリッシュ・ジェントルマン—スポーツ文化の分析—」『体育史研究』第27号、2010年、85頁。
- 66) 増田『指導善導の基準』、189頁。
- 67) 同上、188頁。
- 68) 同上、195頁。
- 69) 『処世大観』は、1905年4月8日に『実業之日本』の臨時増刊号として刊行された。
- 70) 中村敏雄『オフサイドはなぜ反則か』平凡社、2001年11月、231頁。
- 71) 村岡健次、前掲書、200頁。
- 72) 増田、前掲書、167-168頁。
- 73) 同上、323頁。
- 74) 同上、293頁。
- 75) 同上、205頁。
- 76) 同上、36-37頁。
- 77) 濱口瞻「英人の紳士道と我国の武士道」『実業之日本』1908年5月1日号、24-25頁。
- 78) 同上、25頁。
- 79) アレン・グットマン(谷川稔・石井昌幸・池田恵子・石井芳枝訳)『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』昭和堂、1997年8月、144-145頁。
- 80) 菊池大麓「余の英国にて感じたる競争上に於ける武士道」『実業之日本』1908年6月15日号、20頁。
- 81) 同上。
- 82) 村岡、前掲書、250頁。
- 83) 菊池、前掲記事、21頁。
- 84) 菊池大麓「運動の精神」『運動界』第3巻第2号、運動界発行所、1899年2月、2頁。
- 85) 菊池大麓「余の英国にて感じたる競争上に於ける武士道」、22頁。